

沖縄へのオスプレイ配備

日本の防衛にきわめて有益！

中国の急速な軍拡により西太平洋からアジア地域の安定が脅かされています。わが国の安全保障にとっても大きな脅威となつていきます。とりわけ、尖閣問題では、わが国が対応を誤れば、中国の実力行使を懸念せざるを得ない状況です。中国の暴走を抑止するには、日米同盟を基軸とする防衛体制の強化が必要です。わが国が領土を守るための領海警備を強化することはもちろんですが、米軍の力なくしては、大きな抑止力とはなりません。オスプレイの配備などの米海兵隊のさらなる強化は、尖閣問題を拡大しないためにも不可欠です。

“反対のための反対”でなく…



オスプレイとCH46ヘリの性能比較

	オスプレイ	CH46
最大時速: km/時	520	270
航続距離: km	3,900	700
行動半径: km	600	140
輸送兵数: 人	24	12
貨物(内部): kg	9,100	2,300
最大飛行高度: m	7,500	3,000
空中給油	可	不可

マスコミはオスプレイの墜落事故や事故率ばかり問題視します。しかし、沖縄に配備するオスプレイ(海兵隊型のMV22)は、空軍型のCV22に比べ、十万飛行時間当たりの事故率も低く、二〇〇六年から五年間の事故率は一・九三件で、海兵隊所属ヘリを含む平均事故率よりも低い数字です。

アフガンや米国でここ最近オスプレイが不時着や墜落事故があり、死亡者が出て、基地周辺の住民だけではなく日本中に不安が広がっています。しかし、それは作られた危険です。墜落の危険はどんな軍用機にもあります。本当に住民の安全を考えるなら普天間の移転こそ急ぐべきですが、辺野古への移転にも反対しています。要するに、オスプレイ配備への反対も“反対のための反対”であることが分かります。沖縄、尖閣諸島をどうやって守るか、ひいては、日本の防衛、国益の確保をどうするかの見点からオスプレイの問題も考えるべきでしょう。

有事の海兵隊の機動力向上に注目を!!

オスプレイは固定翼機のプロペラとヘリコプターの主回転翼の役割を兼ね備えた回転翼の回転角の角度を変えることで、垂直に離着陸できる世界初の実用機で、長い航続距離と高速飛行が可能です。これまでのCH46ヘリに比べ五倍以上も航続距離が長くなり、兵員も倍、貨物は四倍多く運べ、最大飛行高度も二倍以上、CH46ヘリではできなかった空中給油も可能です。この機の導入により、滑走路がない場所でもヘリのように降りることができ、行動半径は、岩国基地からでは韓国や北朝鮮まで達し、普天間基地からでは、尖閣諸島や台湾まで行くことができます。まさに朝鮮半島の有事や日本の島嶼部を防衛するのに最適な機種です。

軍用の新兵器の宿命として、常に安全性向上が課題となります。オスプレイは海兵隊では二〇〇六年から、空軍では二〇〇五年に配備され、あまり大きな事故は起こっていませんでした。しかし今年四月にモロッコで演習参加中に墜落して海兵隊員が亡くなり、六月にはフロリダ州の訓練場で墜落して負傷者が出ています。このためマスコミの関心が集まりました。とは言え安全性について一番、真剣に考えているのは米軍自身です。構造上の問題などが懸念される場合には、米兵の命を守るために飛行停止を行います。その米軍がオスプレイを飛行停止にはしていません。最近の事故調査報告によると、飛行機の構造的欠陥ではなく、操縦士のミスだと発表されています。米軍は市街地などでの事故を防ぐために、安全運航に努めることを約束していますし、政府としてもさらなる安全性の向上を求めることは当然です。

配備中止で喜ぶ国は無い。

このオスプレイが配備されれば、前述のように中国や北朝鮮に対する抑止力強化につながります。特に尖閣や西南諸島などの島嶼部を防衛することに有効です。となれば、オスプレイが沖縄に配備されなくて、一番喜ぶのは誰でしょう。国内の反対派だけでなく、配備に戦々恐々となっている中国ではないでしょうか。海兵隊にオスプレイが配備され、海兵隊の機動力向上が進めば、尖閣諸島の防衛だけでなく、沖縄を含めた日本全体の防衛にも有益ですし、東南アジア地域にとっても対中国の抑止力になります。ただし、日米同盟があると言っても日本が自力で島嶼部を守る戦力を整え、防衛努力をしなくては米軍も支援のしようがありません。オスプレイ配備は、日米同盟の強化にも不可欠です。反対運動は日本の防衛に大きな脅威を与え、中国を利用するだけだということを認識したいものです。